

John Arblaster and Rob Faesen (eds.),
Mystical Anthropology: Authors from the Low Countries,
(Contemporary Theological Explorations in Christian Mysticism),
London: Routledge, 2017, pp. xi+191, ISBN: 978-1-472-43803-4, A/4, £115.00

阿 部 善 彦

フランドル神秘思想は、われわれが見聞きする哲学史の記述においても一定の存在感を示してきたとも言える。例えば、リュースブルク (1293-1381)。その影響を受けたヘルト・フローテ (1340-1384)。彼が指導した共同生活兄弟団と、その後継者フロレンティウス・ラーデウエインス (1350-1400) が設立したウインデス Heim 系アウグスティヌス律修参事会修道院。これらが「新しい敬虔」(Devotio Moderna) というキーワードとともに言及される。それはまた、エラスムスが共同生活兄弟団の運営する学校で人文主義的教育を受けたことや、『イミタチオ・クリスティ』の著者とされるトマス・ア・ケンピスが、ウインデス Heim 系修道院の修道士であったことなどのエピソードにも関連付けられる。

とはいえ、フランドル神秘思想や「新しい敬虔」は、中世と近世ルネサンス・宗教改革の過渡期において、人文主義と敬虔主義を準備した宗教・思想的運動にすぎないのか。中世後期から近世への「つなぎ」として哲学史の中で役割を果たせば十分なのか。やはり、それだけではものたりない。

日本語文献に限っても、J・ルクレール／F・ヴァンダンプルーク『キリスト教神秘思想史 2 中世の霊性』(上智大学中世思想研究所翻訳・監修, 平凡社, 1997年) や國府田武『ベギン運動とブラバントの霊性』(創文社, 2002年) の中に、フランドル神秘思想それ自体の成立起源と展開について優れた記述がある。しかし、本書もまた、中世と近世の「つなぎ」に限定された哲学史の記述に満足しない本会員に推奨したい一冊である。

本書はいわゆるフランドル神秘思想における神秘思想的人間論に関する論文集である。といっても、厳密には「フランドル」の神秘思想ではない。本書では

「低地諸国」(the Low Countries) としている。通常「フランドル神秘思想」と呼ばれてきたものは、実際には歴史的・地理的な「フランドル」に限定されないし、近代国民国家成立以降のベルギー、オランダ、フランス、ドイツ、ルクセンブルクなどの線引きにも収まらない。むしろ、かつてのブルゴーニュ公国やスペインと一体化したハプスブルグ家の統治を念頭に置かねばならないことを、われわれはしばしば忘却したままである。

大まかに言っても、中世ドイツ語、フランス語、オランダ語の入り混じる地域であるが、本書は、中世オランダ語 (Middle Dutch) で書かれたテキストを取り上げるという括り方をしている。そのため中世フランス語で書かれた『単純な魂の鏡』の著者マルグレート・ポレートは本書では取り上げられないが、同じ編者の *A Companion to John of Ruusbroec* (eds. by John Arblaster/Rob Faesen, Brill, 2014) の連名の第一章 *Mysticism in the Low Countries before Ruusbroec* では、ナザレトのベアトレイスやハーデウィヒら中世オランダ語の著作家と並べて言及されている (ポレートと同じエノー地方出身のワニーのマリーも言及されている)。

「低地諸国」の神秘思想は中世後期に、突然、リュースブルクから始まるのではない。Paul Verdeyen S. J. が執筆する本書第一章 *William of Saint-Thierry and His Trinitarian Mysticism* が示しているように、12世紀サン・ティエーリのギョームに遡る。リエージュ出身のギョームがハーデウィヒやリュースブルクに影響を及ぼしていることは1920年代のJosef Van Mierlo S. J. (1878-1958) や1970年代のVerdeyenの研究で指摘されている (國府田・前掲書もそれを踏まえてギョームから書き起こしている)。

Corpus Christianorum のギョームの著作集の編者でもある Verdeyen は、フランドル神秘思想の源流が、ギョームを介して東方教父思想にまで遡ることを示す。ギョームはクレルヴォーのベルナルドゥスとともに雅歌研究を行い、オリゲネスを熱心に読み、そこから、婚姻神秘思想や魂における神の誕生の教説を受容した。またギョームの愛の理解には、ニュッサのグレゴリオスのエペクタシスに匹敵するような、知性認識と自己否定の絶えざる進展のダイナミズムがあることも指摘される。

その後、ハーデウィヒ及び中世神秘思想の *Visio* についての専門家 Veerle Fraeters による第二章 *The Mystic's Sensorium: Modes of Perceiving and*

Knowing God in Hadewijch's *Visions*, また編者連名による偽ハーデウィヒについての第三章 "The Wild, Wide Oneness": Aspects of the Soul and Its Relationship with God in Pseudo-Hadewijch が続く。前者は、ハーデウィヒの『幻視』における神と一致の「感覚」の「語り」のテキスト分析であるが、身体を離れる脱魂的 (ecstatic) 幻視が語られる「幻視八」の直前の「幻視七」では、脱魂的幻視ではなく、肉体にとどまったままの肉感的幻視が身体的言語によって語られ、そこでは、人間が神的領域に引き上げられるのではなく、むしろ、神が人間の領域のうちに降下して自らを表しているという指摘は、神秘思想における「受肉」の救済的意義を考える上でも興味深い。

第四章から第六章では以下の順でリュースブルクが扱われる。"Poor in Ourselves and Rich in God": Indwelling and Non-identity of Being (*Wesen*) and Suprabeing (*Overwesen*) in John of Ruusbroec (Rob Faesen); Ruusbroec's Notion of the Contemplative Life and his Understanding of the Human Person (Rik Van Nieuwenhove); Retrieving Ruusbroec's Relational Anthropology in Conversation with Jean-Luc Marion (Patrick Cooper)。いずれも優れた研究者の手によるものであり、本書の中心テーマである Mystical Anthropology が現代的文脈を踏まえてより集中的に論じられる所である。

両編者による本書序論、結論に記されている通り、Mystical Anthropology は近代批判の文脈を持っている。確かに神秘思想 (Mysticism) そのものが近代的概念であるが、ここで言う神秘思想は、特にカント以降たんなる幻想と同一視され、不可能とされた直接的な神認識、神経験を、別次元の超常体験・心理現象 (及びその言説) として切り分けて回収・再利用するための仕掛け・装置ではない。

神秘思想は、カール・バルトの言う「完全な他者」(Der ganz Andere) やアンセルムスの言う「それよりも偉大なものが考えられないそれ」(id quo maius cogitari nequit) がいかにして人間と一致・合一可能かという根本問題を引き受けている (cf. p. 1)。言ってみれば神秘思想は近代的「自己」(Self) において困難また不可能となり不在化した他者論的問いを、究極的な形で引き受けているのである。であるからこそ、その応答として、個的・自己完結的に孤立した近代的「自己」(Self) ではなく、Mystical Anthropology が、つまり、存在論的に開かれ関係的である「人間人格」(human person) の根本構造が、中世オランダ語の

諸テキストを通じて論究されるのである。本書全体の目指すところは例えば Faesen 論文のタイトル語句 (Indwelling/Non-identity/Being [Wesen] / Suprabeing [Overwesen]) から十分伝わるだろう。限られた紙幅で言及することは困難であるので本書そのものを是非一読されたい。なお Rik Van Nieuwenhove には *An Introduction to Medieval Theology* (Cambridge University Press, 2012) があるが従来の哲学史的記述では漏れ落ちている神学的問題について丁寧に論じられており、本会員にも推薦したい。

第七章は本会員である菊地智による Jan van Leeuwen's Mystical Anthropology: A Testimony of Lay Mysticism from Medieval Brabant である。フルーネンダール修道院に平信徒として生活した Jan van Leeuwen には多くの著作があり、菊地氏による精力的な研究が継続中である。ここではエックハルトとリュースブルクを介して受容された魂における神の誕生教説や、「新しい敬虔」を特徴づける宗教霊性及び宗教生活の解明にとって不可欠な「共同的生活」(het gemene leven/the common life) の理解が論じられている。

第八章から第十章は The Playing Field of Mysticism: Middle Dutch Anthropological Terminology in the *Spieghel der volcomenheit* by Hendrik Herp o. f. m. (Thom Mertens); The Inner Ascent to God and the Innermost of the Human Person in the *Arnhem Mystical Sermons* (Ineke Cornet); Multilayeredness of the Highest Faculties in the Arnhem Mystical Sermons (Kees Schepers) で、Hendrik Herp (c. 1410-1477) の『完徳の鏡』(*Spieghel der volcomenheit*) と *Arnhem Mystical Sermons* が取り上げられる。

第八章で扱われる『完徳の鏡』はリュースブルク以上に中世オランダ語の神秘思想を体系化したと評価されており、かつ、彼の死後、ラテン語にたびたび翻訳され、特に、16世紀の宗教改革期にカトリック側で読まれ、イタリア語(1522年)、ポルトガル語(1533年)、スペイン語(1543, 1551年)にも訳され、スペイン神秘思想への影響も指摘されている重要文献である。ここでは、その基本思想と神との一致に開かれた人間存在・関係構造が論究される。

第九、十章は、Bernard McGinn がその発見を “perhaps the most exciting recent discovery in the history of medieval and early modern mysticism” (*The Varieties of Vernacular Mysticism 1350-1550*, Crossroad, 2012, p.164) と評価する *Arnhem Mystical Sermons* についてである。同説教集は、アルンヘムの聖

アグネス女子修道院（1458年以降新しい敬虔運動を受けてアウグスティヌス修道規則による共同生活を実施）の大部の中世オランダ語説教集で、162の説教を収録し、同地（ユトレヒト管区）の典礼歴をもとに配列されている。16世紀に成立したものでリュースブルクのほか偽アウグスティヌスの『霊と魂についての書』なども引用され、エックハルト、タウラーの影響も確認できるほか、同時期のオランダ語著作『福音の真珠』（*Die evangelische peerle*, 1538）や『我らの魂の神殿』（*Vanden tempel onser sielen*, 1543）との思想関連も指摘されている。

第九章で Ineke Cornet が示しているように、同説教集では、キリストの身体である教会において霊的生命を活かす様々な秘跡・典礼（儀礼・所作を含む）のひとつひとつの意義が再評価され、それらを徹底的に各自の内的生命に一致させ、心身全体を隈なく神の内的住まいとし、神に向かってどこまでも高く上りゆく人間人格（human person）の霊的・心身的構造が中心問題となる。こうした問題関心はタウラー、そして、『完徳の鏡』、『福音の真珠』に特徴的であるとされる。また終章第十章で Kees Schepers が論じているように、同説教集は、同時期のスコラ的な能力論を前提としながら、人間人格の霊的・心身的能力は、神との人格的関わりを通じて、ついに完成・実現に至るとみているのである。

16世紀は同修道院で神秘思想的テキストが多く収集されたことが分かっており、同時期の宗教改革に対する反応であると推測される。また実際の説教というよりも典礼歴に沿って霊的生活に専心するための黙想書としての性格が強い。また当時、女子修道院内では女性が説教を行う例もあり、そうした説教も含まれている可能性があるほか、ケルンの男子カルトゥジオ会士の説教も含まれる。

トリエント公会議に隠れてしまっているが、宗教改革期のカトリック改革運動として、Laurentius Surius (1523-1578) をはじめとするケルンのカルトゥジオ会士の手によって、タウラー、リュースブルク、『完徳の鏡』、『福音の真珠』などが盛んに編集・出版された。無名の女性の手による『福音の真珠』はラテン語訳版が出され、アンゲルス・シレジウス (c.1624-1677) はそれをもとにドイツ語訳版を作った。

アルンヘムとケルンはライン川でつながっており、ドイツ語圏とオランダ語圏が重なり合う地域であるが、ここに男子修道院と女子修道院の間に緊密な交流があり、宗教改革運動と一線を画する霊的刷新運動（Bernard McGinn が “sixteenth-century mystical renaissance” [ibid., p. 175] と呼ぶ）が進行していたこ

とは、2017年に宗教改革500年を記念した数々の研究成果においても見落とされてきた事象であろう。

確かに2017年は宗教改革500年にあたり数々の研究成果が現れた。しかし、本書のように〈ルターの宗教改革からトリエント公会議まで〉という使い古された図式的な時代理解では見落とされてきた、14世紀後半から17世紀以降にまで続くキリスト教思想・霊性史の根底にある「低地諸国」の神秘思想の意義を問い直す研究はなかったように思われる。その点でも本書は広く読まれてよいだろう。

Thomas M. Osborne Jr.

*Human Action in Thomas Aquinas, John Duns Scotus &
William of Ockham*

Washington, D.C., Catholic University of America Press, 2014,

pp. xxv + 250, ISBN: 978-0-813-22178-6, A/5, \$59.95

藤 本 温

本書は、三人の神学者——トマス、スコトゥス、オッカム——による行為論を比較して、それぞれの行為論の特徴を明らかにしようとするものである。テーマとしては、人間的行為の原因、実践的推論、状況、行為の種別化、無関係な行為等が扱われている。本書評に先行する論評において、この書は三者の比較に際して、トマスを‘default’ (T. Williams) ないし ‘touchstone’ (M. V. Dougherty) としていると評されており、たしかにトマスが本書の中心にいるという傾向はあると思われる。そこで、内容に立ち入る前に、近年のトマスの行為論研究史のなかでの本書の位置を少しだけ描いてみることから始めたい。

全5章のうち、実践的三段論法を扱う第2章を除けば、日本の中世哲学研究者によって取り上げられることの少ない、そして全体としては地味なテーマが扱われていると思われるかもしれない。しかし、トマス研究において行為の記述や種別化の問題は、近年、(本書ではほとんど扱われていない) G. E. M. Anscombe